

言語力育成の場を組み込んだ社会科授業の開発 — 地域の課題をふまえた子どもによる「地域の未来像」の提案を通して —

中谷 昇

奈良県北葛城郡広陵町立真美ヶ丘中学校 教諭

1 はじめに

奈良県中学校教科等研究会社会科部会（以下、県中社研）では、岩田一彦の概念探究型・価値分析型の社会科授業構成理論を土台にして、そこに「言語力」の育成と「習得」・「活用」・「探究」を組み込んだ米田豊の社会科授業構成理論をもとに研究を進めている【図1】。現在、県中社研では「合理的意志決定の場面を取り入れた社会科授業の創造」を研究テーマに据え、地理・歴史・公民の3分野部会において、「探究1」の学習過程の精緻化と「探究2」の授業開発に努めている。県中社研では、岩田の理論をもとにすすめてきた県中社研の研究蓄積に米田の理論を新たに組み込むことにより、子どもの「合理的意志決定能力」の育成を図る「大きな探究」をめざしている。現在、筆者はその研究推進の一翼を担っており、4年後の近畿大会での研究報告を視野に置きながら、研究体制の強化を図っている。

本稿ではまず、森分孝治の考え方をもとに、「思考」・「判断」・「表現」の関係について論じる。次に県中社研の研究推進上の課題を念頭に置きつつ、社会科授業における言語力育成の場を組み込んだ「探究1」・「探究2」の授業モデルを提案する。そして最後に、「探究2」の社会科授業における言語活動の

評価について論じる。

2 社会科における「思考」・「判断」・「表現」の関係

森分は、思考は内容(知識・理解)と形式(思考技能)が一体となったものであり、両者を切り離しては、思考は捉えられないし、判断できないとし、事実に基づいて見方・考え方を得るのが思考であり、そうした考え方に基づいて自分なりの見方・考え方を形成していくのが判断である、と述べている。¹⁾

筆者は「思考」・「判断」・「表現」を別々に論じるのではなく、一体として捉えることが必要であると考えている。したがって、社会科授業において「問い」と「答え」の間に常に思考が位置し、子どもが探究した結果として文章・絵・イラスト等の形で社会認識の習得の度合いが示されたり、その後の価値判断する力につながったりするものが「表現」であるとする。したがって、「思考力」・「判断力」・「表現力」といった言語力を身に付けさせるためには、子どもが自ら解釈・判断する「探究2」の授業開発が求められるとともに、前提としての知識習得の場としての「探究1」の授業改善が図られなければならない。

そこで着目したのが、子どもの思考を重視した社会科授業の改善である。そのために、

教師の評価のみならず、子ども同士の評価の場を組み込んでいる点が特徴である。

3 「小さな探究」から「大きな探究」へ

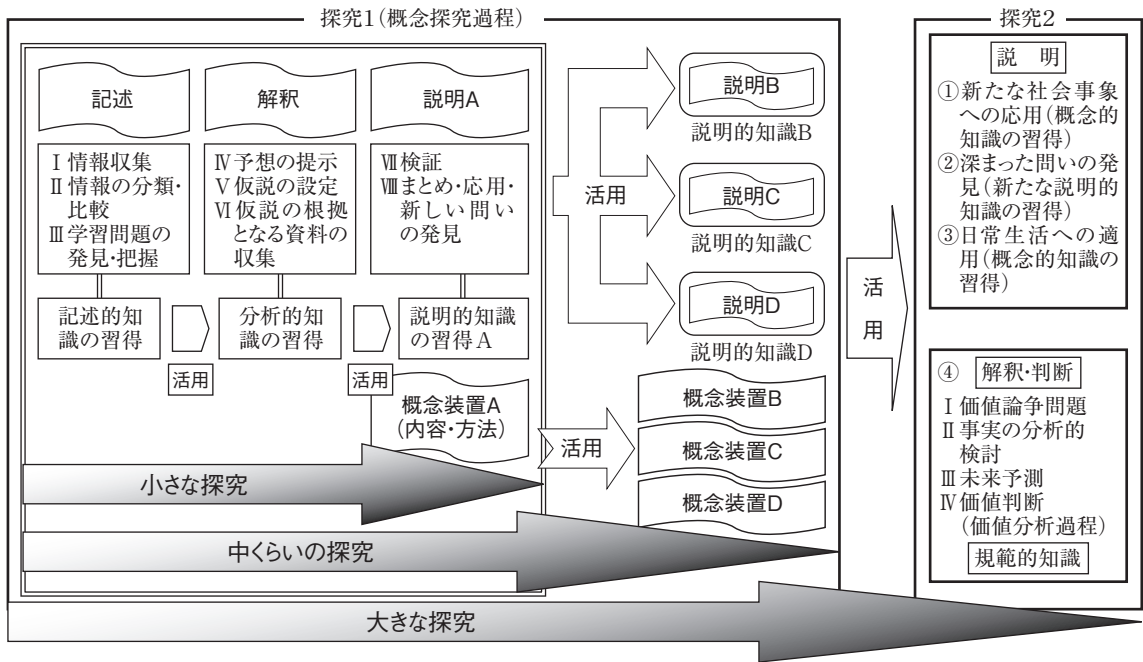
概念探究過程において、社会科教員は「探究1」において仮説を検証していく過程をより重視している。ところが、「Ⅰ情報収集」から「Ⅱ情報の分類・比較」・「Ⅲ学習問題の発見」に至る過程をなおざりにしている傾向がある。「子どもにとっての切実性」のある学習課題でないと「小さな探究」にとどまり、「大きな探究」には発展しないのである。そこで、モデル授業では、子ども一人ひとりの問題意識から各学級としての問いを設定し、それに基づいた「Ⅳ検証」授業を実施し、その結果仮説を修正し、「Ⅴまとめ・応用・新しい問いの発見」へと探究を進めるよう、子どもの思考を重視

した授業開発がなされている。

本単元は、「地域の課題を子ども自らが認識し、それをもとに未来像を提案する」ことがテーマである。子どもから本単元の学習前のアンケートで出された広陵町の課題は【表1】のとおりである。

【表1】 広陵町の課題（学習前アンケート結果）

◎伝統文化の継承	◎公園の整備
◎「地産地消」の推進	◎産業の振興
◎観光の振興	◎商業施設の誘致
・交通の便が悪い	・中学校への給食導入
・交通事故が多い	・ごみの分別方法の改善
・ペットの飼育マナーの改善	・道路の整備
・町内東部・西部の地域格差の改善	
・役場までの距離が遠い	・街灯の設置
・自治会運営の見直し	・水道料金
・より一層のバリアフリー化	
・町立の総合病院の建設	



【図1】 「言語力」の育成と「習得・活用・探究」を組み込んだ社会科授業構成理論

（米田豊の理論をもとに筆者が作成）



【図2】 広陵町のまちづくりの知識構造

学習指導過程

過程	主な問い	予想される発言・思考
問題意識	○「広陵町」ってどんなまちづくりをしているのだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> ・「かぐや姫伝説」をメインにしたまちづくり ・なす・靴下による産業振興をメインにしたまちづくり ・古墳や文化財をメインにしたまちづくり
学習課題の設定	○「広陵町」の課題って何だろう。	<ul style="list-style-type: none"> ・大規模な商業施設がなく、買い物が不便である。 ・古墳が公園になっているけど、観光には役立っていない。 ・なすや靴下の生産で有名だけど、他に地場産業がない。
	みなさんから出された地域的課題は、広陵町の課題と言えるのだろうか。	
検証1	○なぜ、広陵町は「古墳」と「かぐや姫」をメインにしたまちづくりをしているのだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> ・讃岐神社に「かぐや姫伝説」があるから。 ・馬見丘陵一帯が日本有数の規模の古墳群があるから。 ・広陵町の観光ポイントをつくり、アピールするため。
検証2	○なぜ、広陵町は田園風景、自然環境などの地域資源を保全・活用したまちおこしをしているのだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> ・戸立祭のだんじりは江戸時代から続く伝統行事だから。 ・中世に南郷殿が整備した環濠集落を保存するため。 ・真美ヶ丘ニュータウンには見られない広陵町の古き良き伝統文化を後世に残すため。
検証3	○なぜ、広陵町は商業施設を誘致したり、新たな製品・農産物の開発や販路拡大に力を入れているのだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> ・広陵町が「地産地消」を推進しているから。 ・広陵町の地場産業の振興に力を入れたいから。 ・広陵町の農産物や製品が他産地や外国産に押されてきているから。
検証4	○なぜ、広陵町は、国産綿花の販売や独自ブランドの開発に力を入れているのだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> ・付加価値を付けて、安い中国製靴下に負けないようにするため。 ・広陵ブランドを付けて、知名度を上げるため。 ・広陵町内の耕作放棄地の有効活用のため。
新たな問いの設定	○真の広陵町の地域的課題とは何だろう。	<ul style="list-style-type: none"> ・町に専門的医療や救急医療が完備した総合病院がない。 ・高齢者をケア・サポートする福祉施設がきわめて少ない。 ・子どもが安心して運動できる公園がない。 ・地域の魅力を発信する施設がない

相互評価	○広陵町の課題を4つの観点から、仕分けしてみよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・町として対応すべきもの。 ・自治会単位で考えるもの。 ・個人として対応すべきもの。 ・対応する必要性を認めない。
ミニ社会参画	○広陵町のミニまちづくり提案（真美中跡地活用プラン）をしよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・総合病院の建設。 ・高齢者施設の建設。 ・スポーツ公園として整備。 ・地域交流の場として整備。 ・地産地消の拠点として整備。 ・森林に戻す。
相互評価	○広陵町のミニまちづくりプランを5つの観点で評価しよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・地域課題をふまえているか。 ・リアリティがあるプランか。 ・住民意向を反映しているか。 ・周辺住民理解を得られるか。 ・採算性を考えたプランか。
社会参画	○広陵町長にまちづくり提案をしよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・相互評価をふまえて、クラスごとに活用プラン（案）の内容を検討し、広陵町長に提案する。

【表1】の課題をもとに、「はたして子どもが直感的に述べた広陵町の課題は適当であるか」を検証するため、【図2】のように「広陵町のまちづくりの知識構造」を作成し、学習指導過程を設計した。

この学習指導過程の特徴は、子どもの問題意識をもとに教師が検証授業を行い、その後、地域課題の見直しを迫られた子どもが資料を収集・整理・分析し、子ども相互の評価を繰り返しながら、ミニまちづくり提案を経て、町長への提案を行うところにある。

子どもが教師の検証授業によって、事前に思い描いていた地域の課題を覆され、真の地域課題を設定することを余儀なくされたことにより、地域の問題をさらに深く探究していく姿勢が生まれた。また、自ら収集した資料に基づいて根拠あるミニまちづくり提案を行い、その後まちづくり提案ができるよう、段階的に子どもの社会認識が高まるように授業設計がなされている点に注目していただきたい。その結果、イメージとしての地域像でなく、地域の現状把握が正確にできたと考える。

【表2】真美中跡地活用プラン評価シート

学校空き地活用プランの内容	現	実	民	周	採	教師の分析
① 総合病院の建設 ・広陵町には大きな病院がないので、町民が利用しやすい病院を作ればいい。校舎の外装をそのままにして内装だけを変え、多くの人々が入院・利用可能な病院にすれば、コストの削減を図れる。	92.3	50.8	89.2	83.1	35.3	・住民のニーズは高いものの、近隣市町村の総合病院との競合や施設改修費・医療機器導入費もかかり、実現性が乏しいと考えている。
② 健康づくり・ケア施設、老人ホームの建設 ・広い土地を利用して、バリアフリーなどの施設を作って老人ホームにしたい。老人ホームを作ることで地域の小学校や中学校との老人の関わりが深くなり、笑顔があふれる町になるから。	65.0	67.7	61.5	67.7	36.9	・町内に高齢者施設が不十分なことに對する不満を抱いているものの、改修費用や運営費の面から実現は困難と考えている。
③ 公園、スポーツ公園 ・木などをたくさん植えて、自然がいっぱいの公園を作ったらい。なぜなら、子は家の中でゲームなどをしているの、少しでも外で遊べるようにしていったらいい。また、木や川があれば、虫採りや魚捕りができ、子どもが自然とふれあうことができるし、公園にグラウンドを付ければ子どもが運動でき、運動能力も上がる。	63.0	60.0	70.7	75.3	76.1	・町内にある公園のほとんどが史跡公園や児童公園であり、子ども達が散歩している人や遊具で遊んでいる子どもに気兼ねなくボール遊びができる空間がほしいと考えている。
④ 水田、畑への転用 ・小学生や中学生が畑仕事を体験できる畑を作る。それは、小学生の時、田植え体験をしたが、弟はしてなく、今の生活では農業をする機会が少ないので、学校の空き地を畑や田んぼにして、少しでも農業をする機会を増やし、自分たちで作った農産物のおいしさを知るため。	61.5	53.8	36.9	43.0	49.2	・ニュータウンに居住していることから、「人工的につくられた自然」としての公園しか知らず、真の自然とのふれあいを望んでいる。自然体験ができたり、自然に親しむ機会を増やしたいと考えている。
⑤ 地域交流の拠点 ・校舎をそのまま利用し教室の内装を変えて、小さい雑貨屋さんや何かの講習会を開いて、地域の交流の場にしたい。中庭には暑い日でも意外と涼しいので、ガーデニングや遊具を設置して、子どもから高齢者までが楽しめる空間にしたい。また、小物類を作る体験講座を開いて有名にして、地域の活性化も図りたい。	69.2	72.3	58.4	72.3	66.1	・校舎の大部分に手を入れずに、そのまま利用できるといったところがリアリティがあると捉えているところである。広陵町内の地域間・世代間の交流が不足している点にも目が向けられている。
⑥ 地域の魅力発信（博物館・美術館・資料館・体験施設） ・広陵町の昔の遊びや歴史に気軽にふれあうことのできる施設を建てる。また、広陵町の消えてしまった伝統や、消えかかっている伝統を受け継いでいけるような施設を建てるという。	44.6	63.0	47.7	66.1	50.7	・伝統文化の保存・継承の重要性は認識しているものの、他の内容に比べてきわめて優先順位が低く、消極的な姿勢が見られる。
⑦ 商業施設の誘致・建設 ・大型ショッピングモールなどが少ないので、「109」のようなショッピングモールをつくれればいいと思う。そうすれば、今まで大阪などに買い物に行っていた人が広陵町で買物をするようになり、町の収入が増えるから、それを町の環境保護などに使える。	61.5	32.3	50.8	44.6	36.9	・近隣市に大規模商業施設があることや採算性の面からも、実現可能性が低いと考えている。ここでは、従来型の商業施設誘致による振興策の見直しを提言している。
⑧ マンション・住宅地の建設 ・住宅地または超高層マンションを建設して、広陵町の住民を大幅に増やす。	23.1	21.5	21.5	13.8	20.0	・ニュータウンに居住していることから、これ以上の宅地開発は環境破壊につながると考えている。
⑨ 市場 ・広陵町には自然が多くて、また農作物（なす）を作っている人も結構いるので、この空き地を市場にして、広陵町民が集まってくるような活気ある場所にする。農作物が採れない時期はフリーマーケットを開き、利益の数%は広陵町のために使うといい。	73.8	75.3	69.2	69.2	60.0	・町が「地産地消」を推進していることを把握した上で、その拡大策を提案している。また、農産物の端境期の活用方法についてもアイデアを提案している。
⑩ 森 ・以前の丘陵地のような森に戻すために、植林活動を進める。	53.8	44.6	46.1	47.7	30.7	・これ以上の宅地開発を望まない姿勢の表れと考えている。

(注) 「現」→現状認識度(広陵町の課題の反映度)、「実」→実現可能性(現実性があるプランか)、「民」→民意の反映度(広陵町民の意向か)、「周」→周辺住民の理解度(候補地周辺住民の理解が得られるか)、「採」→採算性(採算が取れるか)を表している。
(上表の数字は○、△、×の3段階評価で○をつけた子どもの割合(%)、168名)

4 まちづくり提案に係る相互評価の実際

「新たな問いの設定」の後、3年生全員に地域の課題について再考を求めた。その上で、町全体のことについて考えるにはスケールが大きすぎることから、「真美中跡地活用プラン（仮想のミニまちづくり提案）」を考えさせた。それを整理すると、【表2】の①～⑩の10項目に整理することができた。この中から、教師が1項目中1事例抽出し、子どもの話し合いによって「現状認識度」、「実現可能性」、「民意の反映度」、「周辺住民の理解度」、「採算性」という5つの評価項目が設定され、子どもによるプランの評価がなされた。

「現状認識度」では総合病院の建設が群を抜いており、救急医療への対応ができず、入院施設を持ち合わせていない個人病院が多いという町の実態を如実に反映している。

「実現可能性」では、既存施設をそのまま活用し、すぐに実施可能な「朝市」的なものの実施や地域交流の拠点としての活用が望まれていることがわかる。また、居住地の商圈にショッピングモールが2つあるという実態から考えて、このような大型商業施設の誘致には実現性が乏しいことをよく把握している。

「民意の反映度」・「周辺住民の理解度」では、前述の理由から総合病院の建設が多く、古墳の維持の観点からつくられた史跡公園とは異なるスポーツ公園や自然公園の建設を期待していることがうかがえる。

「採算性」については、既存施設の大規模改築・改修を必要とする総合病院や高齢者施設への転用はコストがかかりすぎるし、近隣の総合病院との競合からも、運営が難しいといった予測を立てているものと思われる。

また、「マンション・住宅地の建設」の提案については、実際ニュータウンに居住している子どもたちが多くからか、すべての評価項目で肯定的な意見が少なく、子ども自身が最も実現性が乏しいと考えており、現状をよく認識していることが読み取れる。

5 おわりに

子どもに言語力の育成場面を意図的に設定することは重要であるものの、仮に設定できたとしても、教師が明確な評価指標をもとに評価できなければ、子どもの社会認識の高まりは把握できない。

前述の課題を克服する手だてとして、本稿では、概念探究過程を経て自ら考えた地域の課題に修正を加え、その課題をもとにして提案されたプランについて、相互評価を繰り返すという手法を用いた。「根拠を明示してまちづくりプランを提案する」ということは、子どもにとってはなかなか困難なことである。しかしながら、「子どもの切実性」に始まり、言語力育成の場面を重ねることにより、必ずや「思考力」・「判断力」・「表現力」などの言語力が育成されるはずである。

〈註〉

- (1) 森分孝治「社会科における思考力育成の原則
-形式主義・活動主義的偏向の克服のために-」
『社会科研究』第47号、1997、pp1-10